

社会の課題に取り組むPBLで 社会を生き抜く資質・能力を育む

埼玉県戸田市

埼玉県戸田市は、これからの社会で求められる資質・能力を「21世紀型スキル」「汎用的スキル」「非認知スキル」とし、その育成に向け、主体的・対話的で深い学びの視点で指導改善を図ってきた。2019年度は、さらなる改善を目的に、子どもが主体的に問題解決に取り組むPBL^{*1}を取り入れた授業づくりを推進している。

取り組みの ポイント

- 1 PBLの進め方の指針とともに、子ども主導で活動を進めるための授業づくりを、教育委員会が支援。
- 2 企業や大学、研究所と連携した情報提供などで社会の変化を実感させ、教員の意識改革を図る。

埼玉県戸田市 プロフィール

◎埼玉県の南東部に位置する戸田市は、美しい緑と豊かな荒川の流に抱かれている。江戸時代には中山道の「戸田の渡し」が置かれ、交通の要衝として栄えた。国内唯一の静水コースである「戸田ポートコース」が有名な、「ポートのまち」でもある。

人口 約14万人 面積 18.17km²
市立学校数 小学校12校、中学校6校
児童生徒数 約1万1300人
電話 048-441-1800(代表)
URL <http://www.toda-c.ed.jp/>

戸田市教育委員会の施策

主体的・対話的で深い学びの方法の 1つとして、子ども主導のPBLを推進

主体的・対話的で深い学びの推進

目指すべき指導を エビデンスに基づき例示

埼玉県南東部に位置し、荒川を挟んで東京都と隣接する戸田市は、ここ数年、首都圏で人気が高まっているまちの1つである。人口増加率は県内1位で、住民の平均年齢は県内で最も若い40.5歳だ。

子育て世代を中心に人口の社会増を続ける要因の1つには、教育施策の充実が挙げられる。「生き生きと共に育む 教育のまち 戸田」を基本理念に掲げ、来るべきAI時代には「AIを活用できる能力」や「AIに代替できない能力」が必要とし、「21世紀

型スキル」「汎用的スキル」「非認知スキル」の育成を重視。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善、ICT環境の整備、小学校英語のいち早い教科化、プログラミング教育の実施など、様々な施策を産官学で推進してきた^{*2}。2019年度もその方針を継続し、5つの柱で施策を展開している(図1)。

「主体的・対話的で深い学び」に関しては、2016年度から文部科学省の研究指定^{*3}を受けて実践研究を重ねてきた。2017年度は、各校の実践成果を基に、授業を自己・他者評価する際の視点を「アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック(以下、指導用ルーブリック)」(P.16図2)と



教育政策室
主幹兼指導主事
水沼美和
みずぬま・みわ

埼玉県公立小学校教諭を経て、2016年度から現職。



教育政策室
主幹兼指導主事
布瀬川裕貴
ふせがわ・ゆうき

埼玉県公立小学校教諭を経て、2017年度から現職。

してまとめ、全教員に配布。翌年から運用を開始した。戸田市教育委員会(以下、市教委)教育政策室の布瀬川裕貴指導主事は、そのねらいを次のように説明する。

「アクティブ・ラーニングは、これまでも力のある教員を中心に実現されてきたものです。しかし、今、豊かな経験を持つベテランに代わり若い教員が増える中で、改めてアクティ

*1 Project-Based Learning の略。プロジェクト型学習。 *2 具体的な取り組みは、本誌2015年度Vol.3特集、2018年度Vol.3特集をご覧ください。
*3 「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」のこと。

図1 2019年度版 戸田市の教育改革の取り組み(抜粋)

戸田市が目指す「世界で活躍できる人間」

- ◎世界に関心を持ち、地球規模で未来を考えることができる子
- ◎自分の力を他者や社会のために使いたいという意欲を持つ子
- ◎多様性を理解し、他者と協働して問題の解決に取り組める子

1 EBPM^{*1}の推進

優れた指導法や教育施策を質的・量的の両方の観点で分析し、授業改善や政策立案に生かす。

「教育政策シンクタンク」(仮称) 設置
エビデンスベースでの政策づくりを自律的に推進するための組織の立ち上げ
★多様なスキルを持った教育行政のプロの採用

外部との共同研究

- ★大学/埼玉県学力調査の分析による非認知能力と学力の関係、特別支援教育に関する研究など
- ★研究所/リーディングスキルの視点からの授業改善
- ★埼玉県教育委員会/埼玉県学力調査と教員質問紙調査を活用した優れた指導法の分析
- ★ベネッセ/「ミライシード」を活用したR-PDCA支援モデル
- ★企業/ユニバーサルデザインに基づく学級経営と授業実践、ペアレントトレーニングの導入、個別の指導計画策定システムの導入、教育効果の可視化の研究

4 EdTechの推進

教育とテクノロジーの融合による新たな学びの推進

(主にICT環境の整備面)

- ★ベネッセほか企業/ICT支援員の各学校への定期派遣、タブレット型PC 3000台導入(小学校2000台、中学校1000台)、思考ツールを活用したアクティブ・ラーニングの推進

2 「授業力」の向上

これからの時代を生き抜くために必要な力を子供たちに身につけさせるため、授業改善をはじめ、すべての教育改革の取組を教室での子供の学びに結びつける。

アクティブ・ラーニング推進のための「戸田型授業改善モデル」
本市独自のループリック(図2)を核として多角的な授業改革の取組を実施する。

「子供たちに身につけさせたい力」は何か

- 各学校における具体的な教育目標の設定と教師の意識改革
- ★具体的な教育目標を設定した「授業力向上プラン」の作成
- ★「非認知スキル育成プログラム」の作成
- ★本市で作成した「資質・能力ループリック」の活用

子供たちが何を学ぶか

- 基礎的な知・徳・体の効果的・効率的な習得
- 産官学民との連携による新たな学びの実践
- ★各学校への産官学民の連携メニューの提示や導入のサポート

子供たちがどう学ぶか

- アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の推進
- ★本市の作成した「学習指導ループリック」の活用促進(学校訪問時の指導、研究協議会での活用等)
- ★県学力調査・全国学力調査等の分析結果のフィードバック
- ★学校訪問改革、校内研修の活性化
- ★県学力調査や教員調査によるループリックの検証、改善
- ★NPO・企業/民間の知見や高い社会人力を活用した教育実践、質の高い教員研修の実施、優れた教育実践の動画配信、オンライン研修

5 多様なニーズへの対応

一人ひとりのニーズに応じた支援の充実

〈教育相談体制の充実〉★全小・中学校にスクールカウンセラーを配置、教育センターに教育心理専門員、スクールソーシャルワーカーを配置 〈特別支援教育〉★専門アドバイザーによる特別支援担当教員の指導 〈日本語指導〉★日本語指導担当教員、日本語指導員の配置 〈家庭学習支援〉★放課後補習授業(不登校支援)★ひきこもりの児童・生徒へのアウトリーチ型支援(いじめ対策)★いじめ防止基本方針の策定 ★電話相談、SNS相談の一部導入など

3 新たな学びの推進

AI(人工知能)では代替できない力やAIを使いこなす力を身につけるため、「21世紀型スキル」「汎用的スキル」「非認知スキル」を育成する。

PEERカリキュラム

- ①:プログラミング教育
 - ★生活科、総合的な学習の時間で一定時数を確保
 - ★ベネッセほか企業/教材提供・貸与、教員研修など
- ②:英語教育
 - ★小学校低学年からの実施、モジュール
 - ★英語の資格・検定試験の検定料の助成(小6、中3)
 - ★教師の英語の資格・検定試験取得率に関する調査
 - ★企業/英語の資格・検定試験対策講座など
- ③:経済教育^{*2}
 - ★生活科、総合的な学習の時間で一定時数を確保
 - ★企業/経済教育の授業の実践、市民大学での経済教育マスター育成
- ④:リーディングスキル^{*3}
 - ★リーディングスキルの考え方や授業改善事例等をまとめたリーフレットの作成
 - ★研究所/リーディングスキルテストの実施、結果の分析と活用

戸田型PBL(プロジェクト型学習)

- ★戸田型PBLの手引きの作成
- ★企業/企業講師によるプロジェクト型探求学習プログラム、プレゼンテーション大会の実施など

豊かな心の育成

- ★NPO/セサミストリートカリキュラムの開発
- ★企業/情報モラル教育
- ★「考え、議論する道徳」の推進

体力向上

- ★企業/プロトレーナーによる小学校低学年への体力向上プログラムの実施など

★教育委員会の取り組み ★産官学民との連携

*1 Evidence Based Policy Making(エビデンス・ベースト・ポリシー・メイキング)の略。客観的な証拠に基づく政策立案のこと。
*2 社会や経済の動きについて、身近な題材を通して学び、よりよい生き方を考える授業。
*3 「読む力」のこと。リーディングスキルの実態把握と、その視点からの日々の授業改善を図っている。
*戸田市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

ブ・ラーニングの視点に基づく授業改善が必要不可欠です。そこで、指導用ループリックを作成し、これまでの授業のどこを見直せばよいのかを示しました。ただ、これはあくまでも例であり、先生方でどんどん工

夫してほしいと説明しています、ループリックも毎年改訂しています」
また、よい指導の要素を明らかにするため、「埼玉県学力・学習状況調査」の結果から子どもの学力を伸ばしていた教員36人(各校2人)に聞

き取り調査を行った。すると、指導用ループリックの5項目の中で最も重視されていたのは、「1 目指すべき目標・評価規準の設定等」だった。教育政策室の水沼美和指導主事は、次のように語る。

「指導力の高い教員は、授業や単元ごとに明確な目標とそれに対応した評価規準を設定していることなどが分かりました。そこで、今年度は、そうした授業づくりのポイントを研修や学校訪問等で広めています。目指すべき指導がエビデンス（根拠）に基づいて可視化されたことで、先生方は進むべき方向性が分かります。若手教員や他市から異動してきた教員の授業づくりの指針にもなっています」

戸田型PBL

課題設定の工夫で 子ども主導のPBLに

2019年度からは、主体的・対話的で深い学びを実現する手法の1つとして、「戸田型PBL（プロジェクト型学習）」を推進している。

「これからの地域や日本、世界で活躍する人材に求められる資質・能力を考えると、社会への貢献意欲や探究心、社会に価値を生み出すための課題解決能力や創造力などが挙げられます。それらの資質・能力を育むためには、子どもが主体的に、仲間と協力しながらプロジェクトに取り組み、問題を解決するPBLが最適だと考えました」（布瀬川指導主事）

推進に際しては、PBLの考え方や活動の種類、学習効果を高めるポイント、授業づくりの基本型（図3）を例示。各校では、担当の指導主事が教員と一緒に授業づくりを行う。水沼指導主事が担当したのは、同市立喜沢小学校だ。同校は、4年生の「総合的な学習の時間」で地域の課題解決をテーマにPBLを進めている（P.18～19参照）。

「同校の担当教員は元同僚であり、率直に意見を交わしながら指導案を作成しました。留意した点は、テーマである地域の課題にいきなり取り組ませるのではなく、まず身の回り

の課題に目を向けて、段階的に考えさせることです。そこで、教科の授業と連携させたプレ・アクティビティ（単元を理解するための活動）を提案しました」（水沼指導主事）

また、課題設定後、すぐに解決策を考えるのではなく、問題の背景を探る重要性も伝えた。PBLの目的は、解決策の発表にたどり着くことだけではなく、子どもが課題に深く向き合うことにもあるからだ。そのために、「子ども主導の活動」をPBLのポイントの1つに挙げている。

「子どもが主体的に取り組むために

は、課題の解決策も子ども自身が考えることが重要です。子ども主導で進めた結果、解決策が成功せずに1年が終わったとしても、それも学びの1つと捉えています。教員は子どもにも成功体験を積ませたいと考えるものですが、人生には失敗する時もあります。どこで、なぜ失敗したのかを子ども自身に振り返らせ、次の活動や学年に生かすことで、学びが深まると考えています」（水沼指導主事）

PBLの評価は、ポートフォリオや成果物、パフォーマンスなどを総合的に見る。中でも、子どもが次のス

図2 「アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック」

1 子供が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。 【目指すべき目標・評価規準の設定等】

- 指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）が設定できたか。
- 本時の目標が達成できているか評価できるような評価規準が設定できたか。
- 子供の学習意欲を高められるような導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 子供が自分の考えを表現することができていたか。 【主に主体的な学びの視点】

- 本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
- 自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている子供たちへの）支援方法を準備し、実行することができたか。
- 自分の考えを表現することができるように、適切な時間や場の設定・ワークシート等の準備ができたか。
- 学習活動は、目標の達成につながっていたか。

3 子供が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。 【主に対話的な学びの視点】

- 子供たちの考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）の設定はできたか。
- 子供たちの考えを広げ深められるよう、教具（タブレットPC、ホワイトボード、ワークシート、具体物等）を工夫し用いていたか。
- 子供たちの考えを板書（ホワイトボード等で示すことも含む）できたか。

4 子供が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。 【主に深い学びの視点】

- 子供たちが本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
- 子供たちに「見方・考え方」を働かせることができるような、学習活動を設定することはできたか。
- 子供たちが働かせていた「見方・考え方」を可視化する（板書・口頭等）ことはできたか。

5 子供が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。 【学びの評価・振り返り】

- 評価規準・評価計画に基づき、本時の子供たちの姿容を評価することができたか。
- 評価するための方法や場面を設定することができたか。
- 子供たちが本時の学習を振り返ることができるような場面が設定できたか。

* 戸田市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

テップに進むための形成的な評価が、最も大切になると捉えている。

また、教科横断で進めるPBLでは、学校全体・学年全体で指導計画を立てる必要がある。特に、教科担任制の中学校では、教科を超えた教員間の連携が問われる。

「中学校教員のPBL研修会で、教科混合のグループで授業づくりをしたところ、専門性を生かしたアイデアがたくさん出てきました。中学校では教員個々の専門性を生かした質の高いPBLが可能であり、そのためにカリキュラム・マネジメントが重要

であることを各校に働きかけていきます」(布瀬川指導主事)

教育委員会の役割

地域や企業を巻き込み
より質の高い教育活動を

市教委では、主体的・対話的で深い学びやPBLなどの重点事項を冊子「指導の重点・主な施策」にまとめ、毎年、全教員に配布。授業づくりの際に参照できるようにした。

教員の自主研究も支援する。希望者が自由に参加できる「教科研究等

研究グループ」を、月1回程度、戸田市立教育センターで実施している。教科ごとの部会のほかに、プログラミング教育、リーディングスキル、イノベーション教育など、全部で13の部会があり、136人の研究員が所属。学校種を超えて小・中の教員が一緒に授業づくりを考えることで、様々な情報や刺激を得て、指導力を向上させる場としている。

産官学連携も、同市の教育施策における重要なポイントだ。ベネッセや様々な企業・大学・研究機関から専門的な知見を得て、教育活動の質を高め、その実践から得たデータを連携先に還元して、Win-Winの関係を築いている。また、市教委では、学校からの要望に応じて連携先に講師の派遣などを依頼したり、連携先から講師を招いた研修を頻繁に開き、最新情報を直接教員に届けたりしている。

「社会で求められる資質・能力とは何かを企業で働く人が語ると、指導主事が説明するよりも説得力があり、先生方はリアリティーを持って受け止められます。様々な分野の専門家の講演を何度も聴くことで、社会が今後どのように変わるのかを次第に理解し、『指導を変えなければならない。そのためにPBLを行うのだ』と、学校全体の意識が変化しつつあります」(布瀬川指導主事)

戸田型PBLは始まったばかりであり、今後も、市教委と学校が協力して実践研究を進めていく。

「PBLが本格的に導入され、地域や企業との連携も進み、文字通り、社会に開かれた教育課程が動き始めました。子どもたちに求められている資質・能力は、学校教育だけでなく社会全体で育てていくべきものです。地域や企業などを巻き込む役割を教育委員会や学校が担い、より質の高い教育活動を築いていきたいと思えます」(水沼指導主事)

図3 戸田型PBL(プロジェクト型学習)の授業づくりの例



*戸田市教育委員会提供資料をそのまま掲載。

戸田市立喜沢きざわ小学校の実践

子どもをしっかり見取った課題設定と授業づくりで一人ひとりが伸びる学びに

◎ 1968（昭和 43）年設立。学校教育目標は「夢と希望をもって 心豊かに たくましく生きる喜沢っ子」の育成。2012 年度から戸田市教育委員会の委嘱を受けて「特別活動」の研究に取り組む。

校長 手塚 浩先生
児童数 367 人
学級数 14 学級（うち特別支援学級 2）
電話 048-442-6383
URL <http://www.toda-c.ed.jp/site/kizawa-e/>

4 年生での PBL

国語と総合学習を連動させ段階を追って学びを深める

戸田市立喜沢きざわ小学校は、2019 年度、市教委が推進する「戸田型 PBL」（P.17 図 3）を、4 年生の「総合的な学習の時間」を中心に行っている。4 年生担任の福田裕美先生は、市教委の水沼指導主事と話し合いながら指導計画を立てた。

単元のめあてを、「地域の課題を自分事として捉え、自分の力で改善する活動を提案し、実行する」と設定。「戸田型 PBL」に示された流れを基本としつつ、アクティビティの際に重要となる多様性の理解と対話の姿勢を掘り起こすプログラムを最初に取り入れた。「プレ・アクティビティ」には、視覚障がい者が登場する国語の題材を通して、身の回りの多様な人たちの問題の解決方法を提案する、ミニ PBL を行うことにした。そして、「メイン・アクティビティ」では、個人ワーク、グループワークの順に行い、考えが段階的に深まるようにした（図 4）。

「地域の課題の前に、身の回りの課題に目を向けさせようとしたところ、国語に適切な単元がありました。9 月に行う単元でしたが、順番を入れ替えて 5 月に扱うことにしました。さらに、前段階として、まちには高齢者や

障がい者、外国人など、多様な人が生活していることに気づかせようと、市が連携する NPO のプログラムを取り入れました」（福田先生）

子ども同士でアドバイスし、考えを深める

授業は、子どもの様子に応じて単元計画を随時変更しながら進めた。

「水沼指導主事から『失敗してもよいので、まずは実践しましょう』と言われ、気負いがなくなりました。型にはめずに柔軟に考え、子どもに必要な活動をタイミングを逃さずに行うことを意識しました」（福田先生）

例えば、導入として行ったプログラムは、どのような相手でも分け隔てなく受け入れる大切さを実感させることを目的としていたが、予想以上に子どもたちのレディネスや対話力があることが分かったため、当初の予定を短縮した。同校では、1 年生から話し合い活動を取り入れ、通常学級と特別支援学級とが交流する特別活動に長年取り組んできたため、子どもたちには既にそうした資質・能力が備わっていた。主幹教諭の伊藤裕二先生は、次のように語る。

「特別活動などにより、どの学級も学習基盤が整っていることで、学びにも意欲的に取り組めることが、本校の子どもたちの特徴です。その強



主幹教諭、学校運営補佐、
教務主任

伊藤裕二

いとう・ゆうじ

埼玉県公立小学校教諭を経て、2018 年度に主幹教諭に昇任。



4 年生担任

福田裕美

ふくだ・ひろみ

埼玉県公立小学校教諭を経て、2019 年度から現職。



特別支援学級担任

岡田悦子

おかだ・えつこ

埼玉県公立小学校教諭を経て、2016 年度から現職。

みが、PBL で生きています」

ほかにも、障がい者への関心の高まりを受けて、パラリンピック出場者の講話と車椅子体験を、予定を早めて実施。障がい者とじかに触れ合った子どもたちは、「目の見えない人や車椅子の人はどうやってボウリングをするのか」などと自分の生活と結びつけ、課題に目を向けていった。

また、水沼指導主事から「独りよがりにならないために、他者からの批評が重要」という助言を受け、福田先生は算数や社会などの授業でも子ども同士の批評を意図的に行わせた。

「『パワーアップアドバイス』と名づけ、もっとよくするためにアドバイスをし合おうと子どもたちに投げか



写真 1 町会長をゲストティチャーに招き、街の様子や課題、街に望むことなどを聞いた。

図4 4年生の「みんな仲よし きざわっ子プロジェクト」の単元計画

導入（「総合的な学習の時間」）

企業の教育プログラムを活用して、価値や多様性への理解を促す授業を実施する。

- ① コミュニケーションの選択：思い込みにとらわれない他者とのかかわり方を考える。
- ② 目に見えない特性：相手の特性を理解し、多様なコミュニケーションの方法を考える。

プレ・アクティビティ（国語 単元「だれもがかかわり合えるように」）

地域の多様性に目を向けさせるため、国語の単元を活用し、障がいや福祉の調べ学習を行う。

- ① 教科書の「手と心で読む」を読み、興味・関心を持ったことを話し合う。
- ② 子どもから挙がったキーワードを基に、調べたいことを決める。
- ③ 子どもに希望を聞き、関心が同じ者でグループを組む。
- ④ グループごとに調べる内容・役割・発表の方法を考える。
- ⑤ 2つのグループで中間発表を行い、批評をし合う。
- ⑥ 批評を踏まえて、発表内容を練り直す。
- ⑦ 全体発表を行う。

1クール目

課題は個人で設定して調べ学習を行い、発表はグループ単位で実施

メイン・アクティビティ（「総合的な学習の時間」）

まちの状況を調べ、まちをよりよくするための課題を自分で設定し、解決策を提案する。

- ① みんなが笑顔になれる理想の街を考える。
- ② 自分たちが考える喜沢の現状と願いを出し合い、街の様子を知る。
- ③ 保護者に喜沢へのイメージについて聞き、それを伝え合う。
- ④ 町会長をゲストティーチャーに招き、喜沢について詳しく話してもらう（写真1）。
- ⑤ 調べたことを基に、喜沢の課題と願いをまとめる。
- ⑥ みんなが笑顔になるための案、理想の街にする工夫を考える。
- ⑦ 計画書を作成し、その内容を友だちと批評し合う。
さらに、地域の人や保護者、専門家にも計画を批評してもらう。
- ⑧ 批評を踏まえて、計画書を考え直す。
- ⑨ 全体発表を行う。

2クール目

個人でPBLに取り組む

3クール目

グループでPBLに取り組む

*喜沢小学校提供資料と取材を基に編集部で作成。



写真2 「先生紹介」では、自分たちで先生にインタビューし、紹介文にまとめて発表。原稿を見ずに、堂々と発表した。多くの子どもが1回の発表で、先生の名前を覚えていた。

のペアワークにより、上級生により深い学びを促すことにあると語る。

「上級生が下級生にパソコンの操作を教えるなど、上級生・下級生共に大きな学びとなりました。活動後、下級生の面倒をよく見るようになった上級生もいます。また、先生紹介はインタビューを行うため、その前に行った学校紹介よりも活動が複雑になります。学びが徐々に深まるようにも留意しました」（岡田先生）

調べ学習や発表資料の作成では、タブレット端末を活用。音声入力など、自身の特性に合わせた使用ができるため、1人で学習を進め、考えを深めていき、自分の意見を主張できるようになる子もいる。「発表資料をICTの『オクリンク』*4を使ってまとめることで、本番では多くの子どもが順序立てて発表できました（写真2）。人前で話すことが苦手な子どもも、自信をつけたようです。また、ICTの活用によってローマ字に興味を持つなど、ほかの学習にもつながっています」（岡田先生）

学校全体では、今後、他学年への展開を図るとともに、プログラミング学習と連動したPBLも検討中だ。

「本校では、『多様性の理解と尊重』『実生活につながる学び』を重視した教育活動を推進しています。PBLは、それらの具体化に適した方法であり、これからも市教委の支援を受けながら活動を深めていきます」（伊藤先生）

特別支援学級でのPBL

異学年ペアのPBLで
上級生も下級生も成長

特別支援学級「ひまわり」でも、主体的・対話的で深い学びを取り入れている。今年度の5～6月に行った「学校紹介」「先生紹介」では、1年生に学校や先生を知ってもらうことを目的に、中・高学年と低学年の子どもがペアとなり、調べた内容を発表した。担任の岡田悦子先生は、次のように語る。

「取り上げる場所や紹介する先生は子ども自身が決め、調べる内容や先生への質問もペアで話し合いながら考えました。課題を提示したのは教員ですが、子ども同士で対話し、考えを深めながら解決する子どもも主導のPBLとしました」

そして、活動の意図は、異学年で

けました。回数を重ねるごとに批評の観点が鋭くなり、例えば、PBLの全体発表前には、子どもたちは『これで伝わるんですか』『この取り組みで本当に人は集まりますか』と率直に批評し合っていました。アドバイスを生かして修正された本番の内容は、格段によいものとなりました

さらに福田先生は、普段の授業から、伝える相手を意識させる活動を取り入れている。その結果、例えば、新聞作りでは、小さい子どもが読むなら難しい漢字を使わないなど、自分が満足するだけでなく、相手を意識しながら表現する場面が増えていった。

そうした授業づくりにより、子どもたちは身の回りの課題からさらに進んで、地域や社会につながる課題を考えられるようになっていった。

*4 ベネッセの学習支援ソフトウェア「ミライシード」の機能の1つ。考えやアイデアを表現する活動を支援するツール。